社会は、静かにあなたを 「呪う」

鈴木祐（著）

単行本（ソフトカバー）：256 ページ
出版：小学館クリエイティブ
価格：1,980 円（税込）

はじめに

本書の「呪い」とは、社会に広がる言葉や価値観が、私たちの思考や感情を静かに縛る現象を指しています。たとえば「日本はオワコン」「親ガチャで人生は決まる」といった言葉です。こうしたフレーズは、十分な根拠がないにもかかわらず、SNS やメディアを通じて拡散し、人々の意思決定に影響を与えています。

著者は10万本の論文と600人の専門家への取材をもとに、これらの通念を科学的に検証しています。本書の目的は、無意識に取り込まれた思い込みの牢獄から自由になるための手がかりを示すことです。

絶望論と幸福強迫の二重の罠

「日本の未来に希望はない」という絶望論は、1人当たりGDPや少子高齢化のデータを根拠に語られることが多いものです。しかし、GDPの順位下落は統計上の偏りを含み、治安や社会保障といった生活の豊かさを反映していません。

本書は、悲観論を前提にすることで思考停止に陥る危険を警告しています。一方、「人は幸せになるために生きている」という通念も呪いとなりえます。幸福を意識的に追い求めるほど、現実との差異が際立ち、主観的幸福感が低下する研究結果が示されています。

経営の現場でも「社員を幸せにすべき」という言葉が独り歩きすると、過度な期待や失望を生みかねません。数字や理想にとらわれず、実態に即した視点を持つことが重要です。

職場を蝕む情熱神話と遺伝決定論

「やりたいことを仕事に」「情熱さえあれば成功できる」という考え方は、耳触りがよい一方でリスクも伴います。研究によれば、情熱はモチベーションの前借りとなり、

燃え尽きを招きやすいことがわかっています。自己評価と成果の乖離を生み、パフォーマンスを下げる場合さえあります。また「親ガチャ」「遺伝率が高いから人生は遺伝で決まる」といった決定論も呪いの一種です。

遺伝率とは集団内のばらつきを説明する統計であり、個人の運命を決める数値ではありません。教育や環境によって結果は大きく変わりうるのです。採用や人材育成において、才能や家庭環境を過大に評価することは、可能性を狭める思考停止につながります。

情報過多時代の組織防衛術

SNSは断定的で感情的な言葉を拡声し、呪いを増幅させる装置になっています。多くの人は「自分は流されない」と考えがちですが、これを著者は「他人事効果」と呼び、最大の落とし穴だと指摘します。むしろ自分も影響を受けやすいという前提に立つことが、防衛の第一歩になります。

本書は「世界を複雑にする」思考を推奨し、単純な物語から距離を取る重要性を強調しています。経営者にとっては、従業員が一面的な情報に支配されないよう、批判的思考力や情報リテラシーを育む環境を整えることが、組織を守るうえで欠かせない視点となります。現代社会に蔓延する通念や断定的な言葉を科学的に検証し、そこから自由になる方法を探る一冊として、目に見えない呪縛を理解することが、組織を健全に保ち、経営判断を誤らないための第一歩となるでしょう。

まとめ

現代社会に蔓延する通念や断定的な言葉を科学的に検証し、そこから自由になる方法を探る一冊です。目に見えない呪縛を理解することが、組織を健全に保ち、経営判断を誤らないための第一歩となるでしょう。